

● テーマ ● ◇ 裏舞姫 ◇ く相沢目線で描くとうなるのかく

① はじめに

・テーマ設定の理由と動機・

この舞姫は、構造が「過去を回想する形」であるため、豊太郎の心情は分かって  
も、相沢などの人物の心情はほとんど描かれていない。だから、この舞姫で鍵とな  
る相沢の視点で舞姫を描くとうなるのかとうなるのかとうなるのかを「豊太郎の視点による本文」  
を根拠に自分なりに現実にしようと思った。そして、例えば、「相沢はある行動の際  
に本当はどう思っていたか」などを探っていきたいと思った。だから、このテー  
マにした。

・結論としてどのようなことを述べるのか・

私は、舞姫の最終部分である相沢の「エリスに豊太郎が日本に帰ると大臣に申し  
上げたことを伝えた」という行動は、相沢が豊太郎に女性関係が出来たことへの妬  
みではないかと考えた。しかし、実際はそうではなく、本当は、「相沢はもともと人  
生の目的を国家有為の人間になること」としていたことが関わっているということ  
を③結論で述べる。

② 本論

まず、本文に基づいて以下のことを確認しておく。

《※ ( ) のページは第一学習社 高等学校現代文 の教科書より》

- 1、(P,285 L,3)「同じく大学に在りし日」という記述より、豊太郎と相沢は東京大学を共  
に過したと考える。
- 2、(P,285 L,5) 相沢は天方伯の秘書官で、性格は快活である。
- 3、(P,283 L,8) 相沢の「心のみ急がれて用事をのみ言いやる」、  
(P,285 L,6) 豊太郎の「別後の情を細叙するにも暇あらず」という双方からの記述よ  
り、豊太郎と相沢は仲が良かったと推測できる。
- 4、(P,286 L,1)「彼が生路はおほむね平滑なり」より相沢は天方伯との仕事上でもトラブ  
ルはなかったとする。
- 5、(国語便覧 P,179) 相沢謙吉は、人生の目的は国家有為の人間になることだと説いてい  
たとする。

以下より、「私」＝相沢 とし、物語風に進めていく。

なお、本文の相沢の登場までを前略とし、(P,279 L,6) の内容より書き始める。

またこれは本文から逸脱せずに書くようにするために、私自身が思う相沢のイメージはできるだけ省くこととする。

## 《前略》

豊太郎はドイツで勉学に励んでいるのか。東京大学にいたときから首席であったから、きっと大丈夫であろうが。

私は、かねてからそう心配していた。そして、久々に官報を見ると、なんとそこに豊太郎についての記事があった。「今日は豊太郎の頑張りが読めるのか」と考えながら、読み進めていったが、私は目を疑った。なんと、あの豊太郎が解雇されてしまったらしい。才能もあり、勉強熱心だった豊太郎がなぜ？・・・こうしては、いられない。友であると豊太郎を助けなければ。そう思い、私はある新聞社に頼み込んだ。「どうか、豊太郎を通信員にしてくれ。」と。

私は考えた。あの豊太郎が解雇されるなんてありえない。彼の身に何かあったに違いない。そうでなければ、才能の詰まった豊太郎をやめさせたりしない、と。そう考えているうちに、私は彼から直接話を聞きたくなった。どうしたら、豊太郎に会えるか。そして、豊太郎は元気なのか。

そうこうしているうちに、明治二十年の冬が来た。私は以前から天方大臣の秘書官だったが、なんと運よく天方大臣がドイツに赴くらしい。私は秘書官という立場を利用して、ドイツに赴けることになった。さらに運のいいことに、天方大臣は豊太郎を必要としていた。そこで私は豊太郎に「急ぎの用で前もって知らせられなかったが、大臣が君に会いたがっているから早く来い。」という内容の手紙を書いた。

豊太郎とは何年会っていないだろうか。同じ東京大学にいた時は、豊太郎はすぐれて品行方正であった。いつしか、そう褒めたことがある。今日は、どんな顔で豊太郎を出迎えるようか。しかし、仕事であるから、軽はずみな行動はできない。

その時、豊太郎が現れた。彼はフロッグコートに身をつつみ、ネクタイを締めていた。少し躊躇していたようだが、見なかったことにした。とりあえず、天方大臣のところへ案内し、私は彼を昼食に誘った。ドイツでの事のあらましを知るために。

彼はドイツでの事のあらましを全て話した。私はこの一連の中で驚いたことがあったが、それは「エリス」という女性のことである。彼のことであるから、きつと優しさで助けたのであろう。しかし、私の彼への心配をよそにエリスとの関係が深くなりつつあるとは。大学のころの勉強熱心な豊太郎はどこへ行ってしまったのだろうか。私はうんざりした。それと同時に勉学の道からはずれている豊太郎が許せなかった。私にとって、人生の目的

とは国家有為の人間になることであつたから。それでも、友である豊太郎を見捨てることはできなかつたので、とりあえず、彼の周りの役人を悪く言つた。しかし、この一連の出来事は彼の「弱い心」が原因である。それを分からせるために、彼にこう忠告した。

「エリスとの恋は慣習というものから生じたもので、ふさわしい相手と知つた上での恋ではない。学識のある者が目的のない生活をするな。エリスとの関係は意を決して断て。とにかく、天方の信用を得ろ。」と。

豊太郎は、エリスとの関係を絶つことに承諾した。私は、彼の「弱き心」や昔から見ていた「友に対して否とは言わない性格」を知つていたので彼はしっかりとエリスとの関係をたつと思つていた。

そして、約一ヶ月がたつた。この時ちようど天方大臣は豊太郎を誘つてロシアへ行こうとしていた。

この頃から、天方大臣の豊太郎への信頼は深いものに思われた。だから、豊太郎は官長に解雇される前の名誉を取り戻しつつあると、私も安心してゐた。あの時の昼食の席で、豊太郎はエリスとの関係を絶つことを受け入れたから、私は、彼はとつとつと関係を保つたと思つてゐた。だから私はこの頃言葉の端に「日本に帰つた後も一緒にこのようにいられるならば」というようになってゐた。

しかし、私は知らなかつた。豊太郎が大臣とロシアにゐる時、エリスと文通をしてゐたことを。

大臣がロシアから帰つてきた。本当に、大臣は豊太郎のことを信頼してゐるに違ひない。大臣は私に「豊太郎と共に日本に帰りたい。彼は語学力にも長けていて、それだけでも役立つ人材である。しかし彼のドイツでの滞在が長すぎる気がするのだが。彼には何かしらみでもあるのか。」と、問うた。「そんなことはない。」私はそう答へた。豊太郎は、「エリスとの関係を絶つ」そう言つた。私はそれを信じてゐた。だから、私は大臣の質問にそう答へたのである。私の返事を聞いた大臣は安心して、大臣は豊太郎を招き、日本への帰国の誘いを伝へた。すると、豊太郎は「承知いたしました」と答へた。

私は安心した。これで、豊太郎は名誉を回復する、と。

しかし、それからというもの豊太郎から連絡が無い。私は心配になつて豊太郎のもとへ訪ねた。すると、彼は熱があり、その隣で女性が手厚く看病をしている。関係は絶つてゐるはずであるが・・・彼女はエリスである。私は不思議に思つたが、彼女は彼が日本へ帰ることはとつとつと知つてゐるだろうと思ひ、エリスに「あの昼食の席での豊太郎と私の約束」「日本へ帰るといふ大臣との約束」をこと細かく告げた。が、エリスの顔色は急に

土色になり「私の豊太郎よ。私に嘘をついていたのね。」と倒れこんでしまった。私は驚いて、母を呼びエリスを横に寝かせた。その後もエリスは目を覚ましては、豊太郎の名を呼び、ののしり、母が与えたものをことごとく投げたが、編んでいた襦袢を与えられると涙を流して泣いた。なるほど、エリスの豊太郎に対する想いは相当深かったのだ。私はこの詳細を豊太郎に告げた。むろん、私は「豊太郎の、私や大臣と交わした約束」を私がエリスに告げたことに対して悪く思っていないかった。なぜって、彼が約束したのだから。豊太郎は日本へ帰らなければいけないが、エリスを放っておくこともできないので、私は豊太郎と考えて、エリスの母に生計を営むのに足りるほどのかすかなお金を与えて、私たちは日本へ帰った。

・・・相沢は最終的には・・・

豊太郎がどう思っているのかは知らないが、通信員としてドイツに残り、そして解雇以前の名誉を取り戻して日本へ帰ることが出来るのも私「相沢謙吉」のおかげであることを忘れてもらっては困る。私は大学の時から豊太郎の勉強熱心さを知っている。だから、豊太郎に助け舟を出した。豊太郎にとって良かれと思っただけなのである。

### ③まとめ

△結論▽

私は初め、「相沢は豊太郎に女性関係ができたこと嫉ましく思ったから、エリスに詳しく豊太郎との約束や日本に帰ることを告げた」と思っていたが、相沢の視点で一連の流れを書いてみて、その考えが変わった。むしろ、その流れで相沢視点の舞姫を書くつもりであったが、本文や参考資料からはそのような相沢の心情は読み取ることが出来なかったし、エリスにそうように告げたのも相沢の正直さからなのではないかと思う。結論として、結局相沢は「人生の目的は国家有為の人間になることだ」という考え方を豊太郎に押し付けようとしてしまったのではないかと考えた。また、それをしたのは、相沢が東京大学で豊太郎の勉強熱心さを見ていたため、自分の考え方が豊太郎にも当てはまると考えたからだと考えられる。そのように考えると、相沢が豊太郎に「目的のない生活はするな」と「色を正して諫め」た理由も上手く説明が出来ると思う。しかし、実際はその相沢の思いやりは豊太郎にとっては余計なお世話になってしまったのである。

以上より、私は、相沢の行動の根底にあるのは「国家有為の人間になる」という人生の目的」であったと考える。

・参考にしたもの・

○ 第一学習社 高等学校現代文 教科書

○ 「舞姫」森鷗外現代語訳 b y 岩本幸一 (長吉高校)

○ 国語便覧